

Türk Ocağı の設立をめぐる二、三の問題

新井政美

はじめに

かつて筆者は、青年トルコ時代(1908-1918年)に組織された最初の民族主義者の団体である「トルコ協会」(Türk Derneği)についての拙論末尾に、次のように記したことがある。すなわち「(トルコ協会の活動に満足できなかった、設立者ユスフ・アクチュラが、その後)「学問」の枠にしばられず、より自由に活動し、発言のできる、新たな団体、雑誌を摸索してゆくことになるはずである。その結果創刊されるのが『テュルク・ユルドゥ』であり、また、組織されるのが「テュルク・オジャウ」であると考えることができよう」[新井1984a: 138]。しかし、事柄は必ずしもそう単純ではなかったようなのである。テュルク・オジャウ(Türk Ocağı, 「トルコ人の炉辺」, 以下、本稿では「炉辺」と略記)設立のきっかけを作ったのが軍医学校生徒であったことは、以前からよく知られていた。彼らがアクチュラを初めとする民族主義的知識人に相談をもちかけて生まれたのが「炉辺」であったことは、周知とすら言えよう。しかし、実は、生徒たちと知識人との合意ができた「実質的設立」(1911年7月)から、政府に綱領を添えて設立を申請し、認可される「公式の設立」(1912年3月)までには9カ月弱の時が流れていたのである。研究者たちは(もちろん筆者も含めて)これまでこのことに別段の注意を払ってこなかったが、考えてみれば、ひとつの団体の「実質的」設立と「公式」の設立とを別々に記述して平然としているのは、必ずしも褒められた態度とは言えまい。「トルコ協会」の場合は、設立の合意ができてから政府の認可を得て正式に発足するまでに1カ月程しかかかっていないし[Tevetoğlu 1986a: 80], さらに驚くに足ることには、「炉辺」設立までのこの9カ月の間に、ほかならないアクチュラたちによって、Türk Yurdu 委員会が設立されて同名の雑誌が創刊され、これが大きな成功を勝ち得ているのである。アクチュラの主導する「トルコ協会」が、まず団体を組織してから同名の機関誌を刊行したことも思い起こしてみるならば、「炉辺」設立と *Türk Yurdu*

創刊とは、(後に後者が前者の機関誌になるだけに)時間的にも、また命名の仕方にも、不自然なものが感じられることは否定できないであろう。

ところで、トルコ歴史学協会(Türk Tarih Kurumu)には、1911年に民族主義的留学生たちによってローザンヌに設立された「ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ」の議事録が所蔵されているが、この議事録の中には、イスタンブルにおける「炉辺」設立に関わる若干の記述も残されている。また、近年、熱烈な民族主義者であるフェトヒ・テヴェトオール氏が、アクチュラと同時代に活躍し、「炉辺」にも深く関わった(そしてテヴェトオール氏自身が青年時代に親しく交わった)幾人かの民族主義者たちについての著書を立て続けに刊行されたが[Tevetoglu 1986a, 1986b, 1988], それらの中には、これまでの研究とは若干異なる情報も含まれているように思われる。さらに、これまでの研究ではほとんど言及されることのなかった、これまた激越な民族主義者ヒュセイン・ナムク・オルクンの回想的研究——典拠を示さない(というより、彼自身の記憶を典拠にした)著作にも興味深い記述を見出すことができる[Orkun 1977]。本稿では、これらの限られた資料を整理しながら、青年トルコ時代のもっとも重要な民族主義者の団体とされる「炉辺」設立の事情について考えてみたいと思う。

I Türk Ocağı の設立——イスタンブル——

「炉辺」設立に関して、最もまとまった記述をしているのは、前述のテヴェトオール氏と、タールク・ザフェル・トゥナヤ氏とである¹⁾。これらの著作の重要な資料源であるアク

1) Tunaya 1984: 432-444. トゥナヤ氏の主要な資料源は、アクチュラの回顧であるが、アクチュラはこれの中で、1918年11月の連合軍占領以後、「炉辺」に関する資料の多くが失われてしまったと記している[Akçura 1928: 441-442]。またトゥナヤ氏はこのアクチュラの回顧のほかに、「炉辺」の活動に深く関わったハムドゥッラ・スプヒ、ハサン・フェリト(ジャンセヴェル)両氏からの聞き取りをあげている。フェトヒ・テヴェトオール氏の著作には、この種の直接的情報がかなり豊富であり、貴重であるが、注意も要する。なお、ジェイコブ・ランドー氏の著作にもまた、まさに氏ならではの博搜による、新しい情報が盛られているが、設立事情に関しては、トゥナヤ氏の域を出ていないと思われる[Landau 1981: 40-41]。「炉辺」についての、信頼できるおそらく唯一の専論であるフランソワ・ジョルジョン氏の論文は、共和国成立後に再建されてから後の「炉辺」の活動が主題であり、青年トルコ期のそれについては、常識的な概観がなされているのみである[Georgeon 1982: 168-170]。常識が必ずしも事実と一致しないことを覚えておくことは、特にトルコ民族主義の発展について考える場合、大切である。例えば「炉辺」については、ジョルジョン氏の研究に全く言及し

チュラ、及びオルクンの回顧も参照しながら、以下、「炉辺」設立の事情を、取り敢えずたどってみることにしよう。

きっかけを軍医学校(Askerî Tıbbiye)生徒がつくったことは動かし難い。アクチュラは、1911年5月11日付で、軍医学校生徒から手紙を受け取ったと記していて、これをオルクンも、またテヴェトオール氏も踏襲している²⁾。ただし、アクチュラが引用している手紙の中には、日付としてオスマン財務暦1327年5月11日が明示されており、しかもそれが水曜日であることまで記されているから(1911年5月11日は木曜日)、手紙は財務暦を西暦に換算した1911年5月24日付であったとするのが正しいであろう。手紙では、トルコ民族が衰退していること、その事実、自分たちが、古い世代のように無関心ではいけないことが、まず明言され、その衰退を喰い止めるには、進化の法則(kanun-ı tekâmül)を重視し、教育の普及に努めることが必要である旨、述べられる。さらに、農業、商業、工業の発展によって獲得される社会的優位(hâkimiyet-i ictimaiye)を、ひからびた政治的優位に優先させることと、「行動すること」がムスリムとして為すべき行為(ibâdet)であり、怠惰は罪であると未来の世代に教えねばならないことが強調される。こうした事業の推進のために、あらゆる政治的争いや混乱の埒外に、「純粹にナショナルで社会的な」団体が組織されるべきであり、さらにこの組織は、将来、アナトリア、ルーメリア、そして国外のトルコ人居住地域(Türk bulunan diğer memleketler)に支部が開かれるべきである。農業、商業、さらに工業の学校も設立したい。これらの点に関する意見を求め、また協力を要請したこの手紙の末尾には「軍医学校生徒である190人のトルコの子ら」(190 Tıbbiyeli Türk evladı)という署名があった³⁾。

ところで、軍医学校の生徒たちは、こうした考えをどのようにして育んだのであろう。民族主義の影響力が、まだ極めて微弱であったこの時期に生徒たちを動かしたのは、どうやらフランス語紙 *Jeune Turc* に掲載されたジェラルド・ヌーリーの論文だったらしい⁴⁾。

ない次の論文もある[Akyüz 1986]。この大家の論文の、特に『ゲンチ・カレムレル』誌についての思い込みについては、別稿で論じる予定である。もちろん、アクユズ氏の論文においても、「炉辺」設立事情については、常識以上の記述はないし、さらに資料源の注記もされていない。また、氏による資料の「引用」は、すべて現代トルコ語への翻案である。

2) Akçura 1928 : 440 ; Orkun 1977 : 100 ; Tevetoglu 1986b : 105. なお、アクユズ氏も同様である [Akyüz 1986 : 201-202]。

3) 以上、手紙の内容は Akçura 1928 : 440-441.

4) Akçura 1928 : 442 ; Tevetoglu 1986b : 105 ; Orkun 1977 : 99. この新聞記事の内容は無念なが

4月の末、あるいは5月の初めに、ヌーリーは、トルコの教育団体設立の必要性を訴えた⁵⁾。さらにこの考えを *Tanin* 紙も支持し、これらの論調が、読者であった軍医学校生徒を動かしたのであった。重要なことは、これらの論調を生徒たちが、「無知に対する戦い」(cehle karşı mücadele) [Akçura 1928 : 442], つまり教育を普及させることの重要性としてとらえたことである。そもそも提唱者のジェラルル・ヌーリーが民族主義者ではない。彼が提唱したものが「トルコ人の」団体であったことも、(この部分がアクチュアによる加筆でなかったとしても)この当時、オスマン・トルコ人の間には「オスマン人たること」(Osmanlılık)と「トルコ人たること」(Türklük)との間の互換性が存在していたことが、すでに明らかなのだから[新井 1984a : 114-122 ; 1984b : 73-75 ; 1984c : 117], つまり、トルコ語を母語とするオスマン帝国のムスリム住民を「トルコ人」と呼ぶことは、この当時すでに珍しいことではなかったのだから、必ずしも奇異とは言えまい。「トルコ人の居住する国外の諸地域」に支部を開くことがうたわれていたとしてもなお、この、いわば「設立趣意書」と呼ぶべきものの中にあるのは、概ね社会改革への意志であったと言うべきであろう。「現在医学校で人間の苦痛の除去のために努力している我々は、かつて、民族(kavim)、宗教の違いを無視して、このオスマンの祖国を政治的分解から救うための(運動の)礎石をおいた我々の先輩たちのように、今はトルコ民族の社会的衰微を喰い止めるために最初の第一歩をするべきである」[Akçura 1928 : 442]という彼らの一文から汲みとれることは、「統一と進歩委員会」を設立した軍医学校の先輩たちの偉業を受け継ぐという彼らの自負と、そして、政治的変革を成し遂げた後に、今度はそれを一層深化させるべく、(オスマン帝国の、あるいは「トルコ人世界」で最も文明的であるはずのオスマン・トルコ人の)社会的変革を準備しなければならない、という決意との二点であろう。「社会的優越」あるいは「進化の法則」という言葉からも窺えるように、そしてトゥナヤ氏も言っているように、彼らが、ズィヤ・ギョカルプの思想的影響下にあったことは十分にありうることであろう⁶⁾。しかし、ギョカルプの登場と、「トルコ民族の衰微」を彼らが憂

ら調査できていない。後日を期したい。ジェラルル・ヌーリー(Celal Nuri İleri, 1877-1938)は、トルコ人の「進歩」のために文学、社会学、政治学、法学、さらに神学など、極めて広汎な分野にわたって、非常に多くの著作を残した啓蒙家である[Ülken 1979 : 392-401 ; *Türk Dili ve Edebiyatı Ansiklopedisi*. IV, İstanbul, 1981 : 359-360]。

5) 「トルコ人の強固な教育団体」(kavî bir Türk maarif cemiyeti) [Akçura 1928 : 442]

6) ただし、ギョカルプは、当時サロニカにいる。『ゲンチ・カレムレル』誌に「今日の哲学」を発表す

えていたことから、トゥナヤ氏のように「帝国よりもトルコ人を救うことの必要性」(İmparatorluktan çok Türkleri kurtarmak gerekliliği) [Tunaya 1984 : 433] を彼らが感じてこの団体の設立を思い立った、とまで論を進めてしまうのは、やや早計であろう。(筆者が縷々述べてきたことをまた繰り返すことになるが)「帝国を救うためにこそトルコ人のレベルを引き上げる必要がある」という考えの道筋は、当時のトルコ人にとって極めて自然なものだったからである。

さて、ジェラルム・ヌーリーの論文に刺戟された生徒たちは、仲間を語らい、学校のある(アジア側の)ハイダルパシャ(Haydarpaşa)と、隣接するカラジャアフメット(Karacaahmet)の墓地とで密議をこらした⁷⁾。360名を越す生徒のうち、トルコ人以外の者と「コスモポリタン」とを除く228人がこの密議に関わったという[Orkun 1977 : 99]。彼らは20人にひとりの割合で代表を選び、なすべき行動について協議を続けた。代表の内訳は、5年生から2名、4年生から2名、3年生からは4名、2年生から2名、そして1年生から1名であったという[Tevetoglu 1986b : 104]。さらに彼らは、ギュルハーネ陸軍病院のドクトル・フアト・サービト(Doktor Fuat Sabit)も招き、遂に、トルコ人の教育水準を引き上げる「ナショナルで社会的な」団体設立のために努力することを決定したのであった。

しかしながら、軍籍にある彼らは、この種の活動を公に行うことができない。そこで、おそらくは何度も書き直しをした後、先に見たような声明文を書き上げ(この段階で生徒の数は190名に減っていたのであろう)、代表たちが2—3人ずつまとまって、(彼らに与えられていた、週に一日半という限られた自由時間を使って、二、三週の間に[Orkun 1977 : 100])彼らの選んだ知識人たちを訪ねていったのである。テヴェトオール氏は、生徒たちに白羽の矢を立てられ、彼らと会見をした知識人のすべてが、積極的な(olumlu)回答をしたと記している[Tevetoglu 1986b : 105]。その中で、生徒たちに最も具体的な形で反応

るのが1911年5月10日、「フイエの進化論的哲学」の翻訳掲載が5月19日である[Tevfik Sedat, "Bugünkü Felsefe," *Genç Kalemler*, 2(2) : 29b-31b, 34a ; Harald Höffding, "Alfred Fouillée'nin Tekâmülcü Felsefesi," *Genç Kalemler*, 2(3) : 45a-47b]。ルイス氏の言うように、著作よりもむしろ個人的な接触を通して大きな影響力を行使したギョカルプであるから[Lewis 1968 : 350, n. 45], 「統一と進歩学校」その他での講演活動の影響がイスタンブルにまで伝わってきて、生徒達を動かしていたと考えるべきかもしれない(新井 1984b : 76-77も参照)。

7) Tunaya 1984 : 434 ; Tevetoglu 1988 : 30 ; Hisar 1954 : 2. ヒサールのこの回顧には、同種のものによくあるような記憶の混乱が見られる。例えば、「炉辺」設立のきっかけとなった軍医学校生徒の活動が、この回顧では「アブデュルハミト専制時代」になされたことになっている。なお、テヴェ

を示したのが、アクチュラの刎頸の友アフメット・フェリト (Ahmet Ferit [Tek], 1876-1971) であった。ある日アフメット・エミンの家を訪ね、そこにユスフ・アクチュラとルザ・テヴフィク (Rıza Tevfik [Bölükbaşı], 1868-1951) をも見出した生徒たちは、近くに住むフェリトの家にも別の生徒が訪ねていることを彼らに話し、一同打ち揃ってフェリトの家に行くことになった。ここで4名の生徒を含む8名が初めての会合を持ち、フェリトの次のような意見を、全員一致で承認するにいたった⁸⁾。

一つのクラブを作ってトルコ人青年をそこに集めること、そしてまず彼らのナショナルな感情を呼び覚まし、それを強化すること、その後で民衆を覚醒させ未来の世代にこの感情を植え付けるため、あらゆる手段に訴えること、講演会を行うこと、本や小冊子を刊行すること、トルコ人の諸学校に物心両面で援助すること、できれば新たに学校をいくつか建てること⁹⁾。

こうして、後の「炉辺」の活動内容の大枠をほぼ示す基本原理が、早くもできあがったのである。しかし、生徒たちの手紙に盛られていた内容と、フェリトのまとめた基本綱領との間には、若干の差異があろう。オルクンによれば、フェリトはこの時、生徒たちに対して概ね次のように指摘したという。生徒たちは教育団体、より具体的には、様々な学校の連絡協議会のようなものを作ろうと考えているようだが、それは、必ずしも大きな社会的影響力を持てるようになるとは考えられない。なぜなら、民衆がそうしたものの必要性を感じているとは思えないからである。学校というのは一つの手段にすぎず、目的ではない。目的は何かというと、それはナショナルな感情 (milliyet duygusu) の覚醒である。この目的に到達するためにこそ、先に記したような方針で活動すべきなのである [Orkun 1977 : 101]。このようにして、具体性に乏しかった生徒たちの希望が、明確な方向を見出したのである。だが、生徒たちの初めの考えと、ここで決定された具体的方針との間に僅かばかりのズレがあったこと、4人の生徒が持ち帰ったこの方針を聞いて、他の生徒たちが、コ

トオール氏の記すところによれば、ジェラル・ヌーリーの論文に動かされて、まず行動を起こしたのは、Doktor Remzi Osman と3年生のHüseyin Fikret とであった [Tevetoğlu 1986b : 105]。このうち前者は、すでに「ドクトル」であること、及びトゥナヤ氏が軍医学校の代表者を学年別に列挙した後、彼を「別のメンバー」(Öteki Üyeler) として紹介していることから推して「若手の教員」であったと考えるのが妥当かもしれない。

8) 以上の事情は、オルクン及びテヴェトオール氏による [Orkun 1977 : 101 ; Tevetoğlu 1986b : 106]。

9) Bir klüp kurarak Türk gençliğini oraya toplamak ve önce onlarda millî hisleri uyandırmak

トのあまりの進展に戸惑いを感じたかもしれないことは、十分に考えられるであろう。

二回目の会合は、アフメット・アガエフの家で開かれ、ここには、「統一と進歩」の代表としてイスタンブル選出議員であるアフメット・ネスイミーが加わり、議長として会を主導した。オルクンによれば、「神聖な目的」を危険にさらさないために政治と関わることを望まなかった軍医学校生徒たちが、当時権力を掌握していた「統一と進歩」の歓心を買って、あわよくば「精神的援助」を得るべく努力しようと望んだと述べているが[Orkun 1977 : 102], どうであろう。逆に、「統一と進歩」の側に、国内のあらゆる文化運動を自らの手元に引き寄せておこうとする意図のあったことは、ほぼ疑いない[Akçura 1928 : 445 ; Alangu 1968 : 428 ; Şapolyo 1934 : 94]。ともあれ、ここで軍医学校生徒たちは自分たちの主張を繰り返し、また、長い議論の末、フェリトの考えが妥当であると再度承認されたという[Orkun 1977 : 102 ; Tevetoglu 1986b : 106]。同じ週のうちに、生徒たちはまた、綱領(tüzük)に書き加えられるべき文言をフェリトのところへ持参し、フェリトはそれを考慮にいれながら必要な部分を綱領に付け加えたという[*ibid.*]。

問題は、これらの集まりがいつ開かれたかということである。これについては残念なことに誰も言及していないのだが、唯一アクチュラが、後述する「炉辺」の「実質的設立」の前に何度か会合があったこと、そして、5月29日(日曜日)にアフメット・アガエフの家で集まり、綱領の執筆にかかるよう決定したことが、手元に残った資料からわかると注記している[Akçura 1928 : 443, n. 1]。5月29日が日曜なのは財務暦1327年なので、これを西暦に換算すると、1911年6月11日になる。前述の第2回会合がこれであったと推定しても、さほど大きな誤差はないであろう。

そして7月3日(月曜日)、231名(にまた増えたことになる[Akçura 1928 : 443 ; Tevetoglu 1988 : 31 ; Tunaya 1984 : 432, 434])の軍医学校生徒を代表するヒュセイン・フィクレトとレムズィ・オスマン(つまり最も早く活動を始めた二人)が、彼らの招きに応じてやってきた7人の知識人たちと最初の会合を持った。7人とは、メフメット・エミン、アフメット・フェリト、ユスフ・アクチュラ、メフメット・アリー・テヴフィク、エミン・ビュレント、ファト・サービト、そしてアフメット・アガエフであった¹⁰⁾。ここで団体設

ve kuvvetlendirmek; bundan sonra halkı uyandırmak ve yetiştirecek nesle bu duyguyu aşılamak için her vâsitaya başvurmak; konferanslar düzenlemek, kitap ve broşürler yayınlamak; Türk okullarına maddî ve mânevî yardımlarda bulunmak; mümkün olursa yeniden okullar açmak. [Tevetoglu 1986b : 106]

10) Akçura 1928 : 443 ; Tevetoglu 1988 : 31. 7人の順序も二人の記述にしたがっている。Mehmet

立の提案が承認され、名称も Türk Ocağı, 「トルコ人の炉辺」と決定された。「炉辺」の「実質的設立」である。この名前を提案したのが、ファト・サービト、つまり「生徒」ではなく、「知識人」に属してはいるが、実は生徒たちとともにハイダルパシャ(あるいはカラジャアフメットの墓地)で団体設立の構想を練っていた人物であったことは¹¹⁾、この会合で決定すべき「設立発起人」(kurucu)と暫定的役員の候補者名簿を、生徒たちが準備してきたという事実 [Akçura 1928 : 443] と合わせて、「炉辺」設立に際して軍医学校生徒が行使しようとした主導性をよく表しているであろう。(なお、「発起人」はメフメット・エミン、アフメット・フェリト、アフメット・アガエフ、ファト・サービトの4名。暫定役員の顔ぶれは、会長メフメット・エミン、副会長ユスフ・アクチュラ、書記メフメット・アリー・テヴフィク、会計ファト・サービトに決定された。アクチュラは以前、自らの主導で作った「トルコ協会」でも、会長、副会長には著名なオスマン・トルコ人民族主義者——それも会長には特に政界にも強いつながりのある人物——を据え、自らは書記になっていた。)

こうして「炉辺」は実質的に設立され、翌1912年3月22日の「公式設立」に向けて、綱領の整備を進めてゆくのである [Akçura 1928 : 444 ; Tevetoglu 1988 : 31 ; Tunaya 1984 : 434]。誰も彼もこのように述べているけれど、この9カ月は、あまりに長すぎはしまいか。一体、彼らはこの間に何をしていたのだろう。綱領の確定だけにこんな長い期間が必要だったのだろうか。

この点については、アクチュラがごく簡略に触れている。この期間に多くの会合がもたれた。8月5日(西暦か財務暦かは不明。後者だとすると、西暦に換算して8月18日)までの議事録がアクチュラの手元にある由。議論は、多く、綱領をめぐるなされた。そのなかで、最もよく議題とされたのは、次のことであった。つまり、この団体は、その目的を達成するために「炉辺」という名のクラブを開くのか。それとも、小冊子や雑誌を刊行し、学校を開くことで満足するのか、という点である。軍医学校生徒は、クラブが開かれると政治と関わってくる危険があるとして、これに強く反対していた [Akçura 1928 : 444]。「学校

Ali Tevfik は「作家」(アクチュラによれば “muharir”, テヴェトオール氏によると “yazar”) で、「ゲンチ・カレムレル」誌にも寄稿する人物。Emin Bülent は詩人。

11) Tevetoglu 1986b : 109. なおオルクンは、Türk Ocağı という名称の提案がこの会合以前、生徒たちが綱領に付け加えるべき文言をアフメット・フェリトのところへ持参した時に、その文言の中に入っていたのだと述べている [Orkun 1977 : 102]。

を開くことで満足する」という表現から、アクチュラが生徒たちとは反対の立場をとっていたことが理解できるであろう。「クラブを開くこと」は、そもそも初めから知識人たちの提案していたことであった。それに対して生徒たちは、二度目の会合で「主張を繰り返し」たり、「同じ週のうちに」綱領に付け加えるべき文言をわざわざアフメット・フェリトに届けたりしていたのである。(オスマン)トルコ人の教育水準の向上を主目的としていた生徒たちと、ロシア領内のトルコ系従属民自立のため、トルコ人の一体性確立に第一義的重要性をおいていたアクチュラとに、どこか根本的にくいちがうところがあったのではないかと思うのは、いささか早計であるかもしれない。が、生徒たちと知識人との間に何らかの考え方の相違があったことは、疑いあるまい¹²⁾。

それだけではない、テヴェトオール氏の引くところによれば、軍医学校生徒に、高等文官学校(Mülkiye Mektebi)の生徒たちも加わってきたのである[Tevetoğlu 1986b : 106-107]。氏の挙げる文官学校生徒のうち、ここではミュニール・マズハル(Münir Mazhar)とハリス・トゥルグット(Halis Turgut)の名を挙げておきたい。前者は解剖学の権威として名高いドクトル・マズハル・パシャの子であるが、パシャは、1908年の革命以後、軍医学校の校長をしていた¹³⁾。軍医学校に通う友人を介して、団体設立の構想を聞かされた文官学校の生徒たちは、バヤズィトにある(現在の文学部の)教室に集まって話し合いを繰り返していた。しかし、その人数が増えるにしたがって、会合に対する妨害も始まったため、彼らは急ぎ綱領の草稿を準備し、「種々の学校からやって来た代表たちと」二年生の教室に集まって、その綱領を承認した。「軍医学校生徒の夢の中にあったこの団体は、文官学校生徒の努力によって実現したのである」¹⁴⁾ このことには、他の研究者は

12) 知識人たちの考え方を検討しないまま、それをアクチュラによって代表させることには、飛躍が感じられるかもしれない。しかし、青年トルコ期の、特にイスタンブルにおける民族主義運動においてアクチュラの果たした役割が極めて大きい上に、この時期には、自ら組織した「トルコ協会」の不振も重なっており、ロシアからの移住者である彼が、新たな運動を懸命に摸索していたことは疑いない。後に見るように、「炉辺」の活動はアクチュラのオフィスを借りて行われることにもなる。そうしたことに、さらにローザンヌ留学生とアクチュラとの交渉をも勘案すれば、「知識人」をここでアクチュラに置き換えることには十分な合理性が認められよう。

13) Gövsa n. d. : 240. ただし、いつまでこの職務にあったかは明らかではない。

14) Tevetoğlu 1986b : 108. テヴェトオール氏は、アリー・チャンカヤの著書からこれを引いているが、筆者はそれをまだ確認できていない [Mücellitoglu Ali Çankaya, *Yeni Mülkiye Tarihi ve Mülkiyeliler*. IV, Ankara, 1968 : 1490-1491]。

まったく言及していないが、筆者はこれを(ある程度まで)事実であったと考えたい。なぜなら、「炉辺」の設立から共和国成立後の再建と発展の、最大の牽引者であった(とアクチュラすら認めている [Akçura 1928 : 445]) ハムドゥッラ・スプヒ (Hamdullah Suphi [Tanrıöver], 1885-1966) が、1930年、「炉辺」設立当時を振り返って、「軍医学校の青年たち、高等文官学校の青年たち、工学校の青年たち、軍隊の若い一群の将校たちと獣医たちが一体となって最初の「炉辺」を作った」と述べていることと見事に符合するからである¹⁵⁾。また、文官学校では、当時アフメット・フェリトが政治史を講じていた [Tevetoglu 1986b : 109 ; Esin 1971 : 139]。こうして、「炉辺」設立には、ぐんぐん膨らんでゆく生徒たち——オスマン帝国の将来を担う若いエリートたち——の動きと、知識人たちの「思惑」という二つの力が作用し、さらに、この二つの力は、おそらく主導権をめぐって綱引きをしていたと考えられるのである。

結果としてその綱引きには勝負がつかず、綱領には、「クラブ」を開くことも含めた総花的内容が盛られることになる¹⁶⁾。だが、この綱引きは知識人の側にも(少なくともアクチュラには)「炉辺」に対する心理的な、ある距離を作りはしなかったろうか。「Türk Yurdu 委員会の公式設立が1911年8月31日であることを考えると、(それは)「炉辺」の事実上

15) Tıbbiyenin gençleri, Mülkiyenin gençleri, Mühendis Mektebinin gençleri, ordumuzun bir takım genç zabitleriyle baytarları birleşerek ilk Türk Ocağını tesis ettiler. [Hamdullah Suphi 1930 : 2]

16) 1913年に初めて刊行された綱領(Türk Ocağının Esasî ve Dahilî Nizamları)の中には、以下のような内容が盛られていた [Akçura 1928 : 439-440]。

第2条——協会の目的：イスラム諸民族の中で第一に(başlıca)重要なものであるトルコ人の民族的(millî)教育と知的、社会的、経済的水準の進展と向上とによって、トルコ民族(ırk)とトルコ語との完璧さ(への到達)に努力する。

第3条——協会はその目的を達成するために Türk Ocağı という名のクラブを開設し、講義、講演会、演芸会(müsamere)を企画すること、書物や小冊子を刊行すること、そして学校を開くことに努力する。民族的富を守り、増やすためにあらゆる種類の知的、技術的職業に従事する人々と交わって、経済的、農業的励ましと覚醒とを行う。そしてこの種の団体が作られ、維持されることに、できる限りの援助を行う。

第4条——Ocak は、その目的を達成すべく努力するに際して、あくまで民族的、社会的立場に留まり、決して政治的な努力はしないし、またいかなる時にも政治的党派に奉仕しない。

の設立である1911年7月3日より後である、ということになる¹⁷⁾と、彼は歯切れの悪い書き方をしているが、実際、綱引きの最中にアクチュラは、メフメット・エミン、アフメット・ヒクメト、アーキル・ムフタールのほか、アフメット・アガエフ、ヒュセインザーデ・アリーという、ロシアからの移住者と語らって、学生寮の建設と雑誌の刊行とを主目的とする *Türk Yurdu* 委員会を設立し、11月末には早くも広大なトルコ人世界の一体性を示す記事を満載した雑誌の創刊号を刊行しているのである[新井 1985: 5-6]。後には確かに「一体」となり、一方が他方の機関誌ともなる *Türk Yurdu* 誌と「炉辺」とであるが、その設立事情は、必ずしも和合的とは思えないのではなかろうか。一体、この9カ月の間にどのようなことが(特にアクチュラと生徒たちの間に)起こっていたのであろうか。

II 留学生との交渉——ローザンヌ——

1911年11月、つまり、イスタンブルで「炉辺」設立をめぐる綱引きが行われる一方で、8月に組織された *Türk Yurdu* 委員会が、同じ名をもつ雑誌の創刊号編輯を着々と進めている頃、ローザンヌにおいても同じ「テュルク・ユルドゥ」を名乗る学生の団体が作られていた。(以下、これを「ユルドゥ」と略称して、イスタンブルの *Türk Yurdu* と区別することにする。なお、スイスにおけるトルコ人留学生の活動全般については別稿で論じる予定にしているので[新井 1989]、ここでは、必要最小限の事実のみを記すにとどめたい。) 1910年1月15日、ローザンヌで学ぶオスマン人留学生によって、「オスマン図書館」(*Osmanlı Kütüphanesi*)なる親睦、学習の集まりが始められた¹⁸⁾。1909年の段階で、ローザンヌで学ぶオスマン人留学生は15名ほどであったと言う¹⁹⁾。アラブ人やアルバニア人も

17) Akçura 1928: 444. なお、ここでもアクチュラは財務暦と西暦とを混同しているので、予めこれを西暦に換算して引用した。

18) Tütanak: I. なお、当然のことながらこの議事録には頁はふられていない。議事録部分に至るまで(つまり会則その他の部分)は、ノートに記載が始まる頁を第I頁としてローマ数字で仮に頁をふり、議事録部分については「第何回会合の何頁」という形で示してゆくことにする。1971年に外務省から寄贈されて以来、研究者によって分析されることなしに死蔵されてきたこの資料の概要、性格については、前掲の拙稿で論じる予定である。

19) Yurtçular Yasası: 40. これは、1913年にジュネーヴで開かれた第2回「ユルドゥ」連合会議の議事録であり、トゥナヤ氏が、スイスにおけるトルコ人留学生の活動に関する唯一の資料であると述べた貴重な刊本である[Tunaya 1984: 494, n. 3]。

含めたこの組織では、定期的に講演会などを企画していたが、1911年、祖国で生起する様々な出来事を観察していた(memlekette mütevaliyen hudus eden vukuata bir nazar-ı basiret ile bakan)何人かのトルコ人青年たちは、「オスマン図書室」から分離して、「ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ」なる新たな団体を作り上げた[Yurtçular Yasası : 42]。11月4日のことであった[Tutanak : I]。彼らの理想は、「オスマンという政治的名目の下で押し潰されたトルコ人に、民族的意識を目覚めさせる」ことであった²⁰⁾。つまり、ここでもオスマン・トルコ人の覚醒が目標とされていた。「理想」を表すために彼らが常に“mefkûre”という、ズィヤ・ギョカルプの造語になる単語を使っていたことは、ギョカルプの影響が、この時期いかに広汎に及んでいたかをよく示していると同時に²¹⁾、ローザンヌの学生たちと、イスタンブールの軍医学校生徒たちとの間に、団体設立の動機における共通性が存在していたことも暗示しているであろう。

「ユルドゥ」を設立したローザンヌの学生たちは、12月2日以後、ほぼ毎週一回、土曜日に集まって、綱領の検討をすると同時に、各地に手紙を送って自らの思想、行動を説明し、また、おそらくは協力も要請していた。そうした手紙の中に、ユスフ・アクチュラ宛のものも含まれていた。「ユルドゥ」宛に送られてくる手紙の内容は、普通ほとんど議事録には残されていないが、アクチュラからのものは、「ユルドゥ」の存立に関わるものであったため、断片的ながら、記録されることになった。以下、これらを検討してゆきたい。議事録は、ものの性質上、必ずしも丁寧には書かれていない。本来ならばコピーを提示して解説の可否を読者諸賢に問うべきところであるが、筆者は結局、マイクロフィルムすら入手できなかったで、やむをえず現代トルコ語の方式によるローマ字転写のみを本稿末尾に示し、ここでは直ちに日本語訳にとりかかることにする。また文章も明快とは言い難いので、まず、直訳をした上で、解釈をほどこしたい。

アクチュラから手紙が——内容から推して「ユルドゥ」の出した手紙への回答として——届いたことは、1911年12月30日に開かれた第6回の会合で、突然議事録に現れる。以下、関連記事を順に検討してゆくことにする。

20) Osmanlı nam-ı siyasiyesi altında ezilegelen Türklükte bir vicdan-ı millî uyandırmak [Yurtçular Yasası : 42].

21) 留学生へのギョカルプの影響については別稿でも触れるつもりだが、さしあたり以下を参照。

Tunaya 1984 : 495.

〈日本語訳〉①(1911年12月30日)

ヒュスニ・ベイが、ユスフ・アクチュラからきた手紙について議論を始め、その主題ではいかなる形でも努力しないと述べたアクチュラオール・ユルドゥの公的性格に対して、新たな諸ユルドゥの公的性格がいかにして可能であろうかと述べた。

イスマイルは、私は諸ユルドゥが一つの本部に支持されることを不可欠であると思っている、と言った。ナズミ・ベイはこれに反対して、我々の間で支部の問題が矛盾撞着しないために、別のことが考えられるよう発言した。

アクチュラの手紙をあれこれ長く検討して、同じ目的を追及しているのに、なぜ関わらずにいるのか、関わらずにいることを望むのかが理解されなかった。綱領によれば、本部に関しては特権のないこと、ただ代表権が与えられていることを提起した全出席会員は、なぜアクチュラが署名をしに来るのかを理解しなかった。その後ラーグブに、カバサカル・ユルドゥの公的性格とプログラムとがどのようになっているかが問われた。ラーグブは答えて、一つの新聞の編輯委員会を形成しているアフメット・アガエフ、アフメット・ヒクメト、アクチュラその他の人々がカバサカルで《テュルク・ユルドゥ》の下で集まったこと、しかしこの状態では留まらず、もう少し大きな目的を持っていると考えていることを述べた。

この代表権の責任が理解されること、例えばコンヤ・ユルドゥのなすであろう誤りの責任を、この代表権が負うであろうことは当然であることを、何人かの人が述べ、活動を始めるための小さな特権以外のことは承認しないであろうことが繰り返され、この問題で、アクチュラと再度交渉する必要があると言われた。そして、ラーグブが個人的な形でアクチュラと話し合うことが適当であるとされた。《テュルク・ユルドゥ》という名で、ハイダルパシャで軍医学校生徒たちがまさに設立しようとしている団体について発言され、彼らの綱領を要求することが全運営委員に言い渡された。この後、個人的提案に移って、イスタンブルで設立された《トルコ教育普及》協会の綱領がもたらされるようにという、ファズリー・ベイの提案が承認され、4時に会合が終わった。

〈解釈〉①

ローザンヌ「ユルドゥ」は、おそらく支援を得るため、アクチュラに手紙を書いていた。しかし、返事の中でアクチュラは、「その主題ではいかなる形でも努力しない」と、協力を拒否してきた。協力するための条件は、アクチュラの作る組織(「本部」)にローザンヌが従属し、「支部」として活動することだったろうと推測される。イスマイルはこれをやむを得ないと述べたが、これはナズミによって直ちに反駁された。ただしナズミも、「支部」の問題をめぐる諸「ユルドゥ」(具体的にはおそらく同じ目的を追及しているはずのローザンヌとイスタンブルと)が対立しないように、何か新しい手立てを考えなければならないと注意深く述べた。ローザンヌの綱領では「本部」に特権は与えられていない。しかも各「ユルドゥ」には代表権が付与されている。つまり、ローザンヌ以外に「ユルドゥ」ができて、それらはそれぞれ独立して活動するはずになっている。この「独立して活動すること、自立性」が、議事録にある「公的性格」及び「代表権」の具体的内容である。

う。にもかかわらず、アクチュラは「本部」としてローザンヌの活動を監視し、「署名」しに来ようと言う。「代表権」者には、自立して活動できるだけでなく、責任という負担も付随する。（「コンヤ・ユルドゥ」については全く不明である。）このように考えているローザンヌに対して優越性（そして、先に作られたという「優先権」の意識も含まれているかもしれない）を主張するアクチュラの *Türk Yurdu* は、カバサカルでアクチュラのほかアガエフやアフメット・ヒクメト達によって作られたと、記されている。これは、事実を忠実に反映した記述であると思われる。1911年8月31日に *Türk Yurdu* 委員会の設立のために集まった6名の中に、彼らは確かに入っている [Akçura 1928 : 437 ; Tevetoglu 1986a : 82]。しかもカバサカルは、イスタンブールの旧市街、スルタンアフメット広場に程近い地区であった²²⁾。これは「炉辺」の開かれるディーヴァン・ヨル (Divan Yolu) や、*Türk Yurdu* 誌の編集部や図書室の置かれるバープ・アーリー通り (Bâb-ı Âli Caddesi)、ヌール・オスマニエ通り (Nur-ı Osmaniye Caddesi)²³⁾ にも近接しているはずで、*Türk Yurdu* に関するこの記述は、議事録に記載されている事柄全体の信憑性をも高めているように思われる。大事なことは、雑誌の刊行と学生寮建設とを目的としていたはずの *Türk Yurdu* 委員会が、「もう少し大きな目的」を持ち、むしろ「炉辺」に性格の類似しているローザンヌ「ユルドゥ」に介入しようとしていたことである。しかも、「ハイダルパシャの軍医学校生徒の作ろうとしている」組織が「テュルク・ユルドゥ」として紹介されていることである。それも見逃せないことに、ローザンヌの学生にはどうやらアクチュラを通して初めてそれが伝えられたらしい。つまり、ここでは「アクチュラのユルドゥ」＝「カバサカル・ユルドゥ」と「ハイダルパシャのユルドゥ」とが別々のものとして認識されているのである。いずれにせよ、交渉は続いてゆく。なお、ローザンヌ「ユルドゥ」の中心人物は、*Türk Yurdu* 委員会設立に関する情報を持っていたラーグブである。

〈日本語訳〉②(1912年1月6日?)

ラーグブは、誰にも言わず、前回会合の諸決定を実行したこと、そしてこの方向でアクチュラオールにこのような声明を送ったこと、ハイダルパシャの人たちと教育普及協会とに、要請されたように手紙を書いたことを述べて、ハイダルパシャの人々の「ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ、ハイダルパシャ支部」という印章とスタンプとともに届いた手紙と綱領とを手にとった。両方を突き合わせ、綱領とその諸条項とを彼らがどのように理解しているかが説明してある手紙とともに読んだ。……この綱領における諸条項は、あたかもその受容を我々が強制されているかのように、我々の仕事を困難であると示し、そして我々を脅かしていた。例えば、トルコで開かれるすべての「ユルドゥ」はハイダルパシャ本部の綱領を受け入れ、(その)許可を得て自分自身を認識し、認識させることができ、そしてそれが、ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ、ハイダル

22) “Kabasakal Camii,” in *Meydan-Larousse*. VI, Istanbul, 1971 : 728.

23) 「炉辺」が Divan Yolu にあったことについては、例えば、Tevetoglu 1988 : 31. *Türk Yurdu* の編集部や図書室については、*Türk Yurdu* 誌や *Türk Sözü* 誌の裏表紙を参照。

パシャ支部の支部という状態から前に進めないという心配と、ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ会長ラーグブが、来年イズミルで開かれる第5「ユルドゥ」において、ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ、ハイダルパシャ支部に「はい、左様でございます」という切り札で登場するであろうということが、目に浮かんできた。問題はかなり重要であった。

さしあたり自分たちのことに努めて、我々の立場の確実性と自立性を獲得することで合意できるであろうから、ローザンヌ支部という文言がスタンプから削除されることに全会員が決定を下し、ラーグブに(そのように)要求すべく行動することが言い渡された。

〈解釈〉②

ラーグブはアクチュラと軍医学校生徒とに手紙を送った。それに対して「ハイダルパシャの人々」からの返事が届いている。この「ハイダルパシャの人々」が文字通り軍医学校生徒であるのか否か、大きな問題であるが、とりあえず、イスタンブル側が、ローザンヌの主体性を否定してかかってきていることは疑いあるまい。ことは、正しく重要である。とりあえずローザンヌとしては、独自の活動を展開してその立場の強化を図る、という点では全員の合意が成り立つから、スタンプから「ローザンヌ」と「支部」という二つの文言を削除するように要求することになった。つまり、「ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ、ハイダルパシャ支部」を「テュルク・ユルドゥ、ハイダルパシャ」にさせることで、それと「テュルク・ユルドゥ、ローザンヌ」とが、本部、支部の序列なしに並び立つことになる。そういう論理だと思う。なお、イズミルで開かれる「第5回ユルドゥ」なるものも不明である。また、議事録にはこの回の会合の日付けが落ちているが、毎週土曜日に開かれているので、1月6日と推定した。

〈日本語訳〉③(1912年1月13日)

ラーグブは、あるいは(ジュネーヴからきた)手紙の中の他の諸条項、あるいは、彼に関係のある、その専断の点、またあるいは、アクチュラと公式に話し合いに入った不適切性、それらの罰を与えるために、日曜日にジュネーヴへ行くであろうと述べた。これに(対し)アクチュラとの話し合いがただラーグブにだけ任せられた個人的なものである(のに)、しかし、二つのユルドゥいずれにも関係のある、この本部の問題が、我々に知らせずにジュネーヴの人々によって大胆にもかき混ぜられたこと、手紙を書いた後でアクチュラとの話し合いに入ったことを知らせたこと、(これらが)全会員を怒らせた。

……本部が、許可を与える以外の何ものもなし得ないというのは、しかし、代表権者というより代理人である、ということと、心配なく、恐れもなく、彼の言うであろう小さな特権の事を解決するであろうこととに関するラーグブの長い演説が拝聴された。ヒュスニ・ベイは、規律正しさという美德を持っていない者たちは、ひとつの本部にさえ繋があれば、自分のために努力するというのは自然なことだ。これらの者たちの間に、アクチュラの言う「関係」が成り立ちうるのであろう。なぜなら、目的は一つなのだ。ただ、努力の道筋が同じにはなりえないであろう。ハイダルパシャを手に取り取るではないか。軍医学校生徒たちは、トルコ人を「オスマン人たること」を忘れずに前進させることを望んである。しかし彼らの目的はやはり「トルコ人たること」にある。ラーグブも、

アクチュラの手紙から一行を読みながら、あちこちで開かれる諸ユルドゥの生命能力を考えた後に正式の繋がりが考えられるのが当然であると述べた。

〈解釈〉③

ジュネーヴから手紙が届いた。ローザンヌよりかなり遅れて、1911年4月15日に「オスマン図書室」を作ったジュネーヴの学生たちは、今度はローザンヌより若干早く、10月21日に「ジュネーヴ・テュルク・ユルドゥ」を設立していた[Yurtçular Yasası: 25, 32]。しかしこの活動は、初め必ずしも活発ではなく、第1回の連合会議は、ローザンヌの主導のもとで12月27日にローザンヌ近郊で開かれていた。この会議の出すべき声明文の執筆がジュネーヴの会員に任せられ、ローザンヌはその草稿の届くのを待っていたのである。ところが、ジュネーヴはとんだ独断専行をしてくれた。アクチュラは、ジュネーヴにも手紙を出して、こちらを懐柔しにかかっていたものとみえ、ジュネーヴはローザンヌに相談することなくアクチュラと話し合いに入っていた。声明文草稿の諸条項の内容ともあわせ、ラーグブはジュネーヴを「罰しに」行くと言っている。「彼に関係のある、その専断の点」というのが、いまひとつはっきりしないが、いずれにせよ、他の会員もジュネーヴのやりかたに大いに腹を立てたようである。「本部」は「支部」の行動に許可を与えるだけである、というのはしかし、自立性を持った代表権者に対して取られるべき態度ではなく、自立性のない代理人に対する態度である。心配することはない、アクチュラ(あるいはアクチュラとジュネーヴ)の言うであろう小さな特権の問題は、私がきちんと解決するから、というラーグブの長々しい「演説」が拝聴された。ナズミ・ベイは、「本部」に従属する道を選ぼうとする人々を揶揄すると同時に、トルコ民族主義の性格についての大切な発言もした。ラーグブはまた、諸ユルドゥの自立性をまず考慮してから、それら相互の関係が考えられるべきであると述べた。

〈日本語訳〉④(1912年1月21日)

この後ラーグブが、ハイダルパシャの人々がアクチュラと行った話し合いに発言を移して、ハイダルパシャの人々の手紙を、そしてそこに引かれている話し合いの模様を読み上げた。何度か前の会合で、アクチュラが、組織(とはいかなるものであるか)の法を知らないことと、多くのテュルク・ユルドゥがそれぞれの自立性を獲得しえないであろうことを述べたナールに、アクチュラが酔っぱらってはいないことを示そうと(ナールに)対抗して思い起こさせた友人たちは、理由ははっきりしないが、少し失望した。ともあれ、アクチュラが、「はい……いいえ……わかりません」という彼の言葉から、酔っぱらっているのではなく、しかし簡単には理解できない一つの状態で、(我々、あるいはハイダルパシャの人々に対して)出てきていることが見られた。アクチュラ・ベイは、ハイダルパシャの人々に、多くのユルドゥがそれぞれ自立性を得て、それぞれに活動しうることに関しては、多くの知識がないと声明して、政府に申請することによってこれを確かめることができるであろうと言ったらしい。これに関して、ヒュスニとナールとが、なされるべきことは、名称を変更することと、独立して活動することであると声明した。後日に延ばして、来たるべき手紙の内容に俟つのが適当であるとみなされた。

〈解釈〉④

今度は軍医学校生徒からの手紙が届いた。彼らとアクチュラとの話し合いの様子が報告されている。ナーイルは、何回か前の会合で、アクチュラが組織のありかたを知らない不埒者、酔っぱらいで、そんな男のことだから諸ユルドゥの自立性もとても覚束ない、と述べていた。 (“cemiyetin kanunu” が政府の公布した「結社法」であるとし、それをアクチュラが知らないと解釈すると、その「結社法」の存在ゆえに、むしろ諸ユルドゥの自立性が保証されてくるということになろう。したがってここでは、「組織のありかた」と考えるべきだと思われる。)これに対してアクチュラのその後の対応に期待を持っていた者たちが反対意見を述べ、多分ナーイルをたしなめていたのだろう。しかし、軍医学校生徒からの手紙は、その期待を裏切るものであったらしい。生徒達にアクチュラは、諸ユルドゥの自立性についてはっきりした回答を与えていない。「はい……いいえ……わかりません」と確答を避けるアクチュラは、まことに端倪すべからざる人物である。ヒュスニとナーイルとは、もはや組織の名前を変更して活動するしかないとまで述べた。それはまた、あまりに気短かだということであろうか、次の手紙を待ってみよう、ということになった。

ところが「次の手紙」は来なかった。来たのかもしれないが、議事録には記載されなかった。実際、アクチュラとの交渉に関わる記事は、これ以後まったく見られないのである。

Ⅲ Türk Ocağı と Türk Yurdu——再びイスタンブル——

上で検討した僅かな、そして断片的記録からでも、我々は少なくとも以下の重要な事柄を確認することができるであろう。一つは、アクチュラが、トルコ民族主義に関わる様々な運動を(特に Yurd を名乗る運動は)すべて自分の管轄下に置こうとしていたこと。そしていまひとつは、Türk Ocağı と Türk Yurdu とが、この段階では明確に区別されていなかったことである。

講演会を主な活動内容とし、トルコ人の間の教育の普及を最大の目的にしている(スイスにおける)民族主義的学生の団体²⁴⁾。——これは、軍医学校生徒の考えていた「炉辺」に大変に似通った組織である。そしてその組織をアクチュラは自らの監視下におこうとしていた。しかも、“yurd” (母国)と“ocak” (炉辺)というこの二つの単語には、その意味に近似性が存在していて、例えば現在でも「学生寮」は“yurd”と呼ばれるし、“ocak”には「同じ目的、考えを持つものの集まり」の意味がある。つまり、人々の(特に学生、生徒の)集まりに「炉辺」とか「母国」という名を冠することは、極めて平凡な、陳腐ですらある

24) 「ローザンヌ・テュルク・ユルドゥ」の綱領その他については、新井 1989を参照。

ことだったと考えられるのである。だとするならば一層、「炉辺」設立についての、軍医学校生徒との合意が成り立ったあとで、それとは別に「母国」(Türk Yurdu, 「トルコ人の母国」)を作ったアクチュラの行動は、やはり奇異とされるべきであろう。さらに、12月30日付の①の中で、で Türk Yurdu 委員会が、アクチュラ、アガエフ等によって作られた「1つの新聞の編輯」のための組織として正しく認識されていて、しかもその上で、軍医学校生徒の作ろうとしているものと同じく Türk Yurdu として紹介されていることは、これは穏やかではない。実際、「炉辺」の最初期の会合は「アクチュラの Türk Yurdu の事務所で」行われているのであり [Orkun 1977: 102-103; Tevetoglu 1986b: 112], こうしたことから、少なくともアクチュラが、軍医学校生徒と綱引きをする一方で、ほぼ自分のものといえる Türk Yurdu と「炉辺」とをほとんど同一視していたことは疑いのないところであろう。そして、そうであるならば、「炉辺」の活動をも彼が自分の傘下に入れようとしていたことは、極めて当然の帰結であろう。さらに、「炉辺」を Türk Yurdu によって統轄しようとアクチュラがしていたならば、後者に対する前者の自立性をめぐって生徒たちと話し合いをしていたと、推理を進めることも決して不可能ではあるまい。

これ以上の憶測を避けるため、ここで、「炉辺」の公式設立後の、それと Türk Yurdu との関係を見てみることにしよう。「炉辺」が政府に認可されて正式に発足した記念すべき事実を、先に出発して、既に大きな成功を収めつつある *Türk Yurdu* 誌は、どのように報じていたであろう。我々は、「炉辺」発足直後の号の巻末、最後の記事として、次のような記述を見ることができる。「1328年3月18日付の *Tanin* 紙で、大きな喜びとともに我々は以下の数行を読んだ：高貴なる神の恩寵によって作られた Türk Ocağı の政府からの認可が得られたことが宣言されている。代表者は以下の通り：キャーフヤ・エミン、アアオール、ハーリス・トゥルグット」²⁵⁾。あまりと言えばあまりの素っ気なさではなからうか。

25) “Türk Ocağı,” *Türk Yurdu*, 1st series, I/10, 1912, p. 312. なお、政府に提出した申請書に署名した人物としては、テヴェトオール氏がメフメット・エミン、アフメット・フェリト、アフメット・アガエフ、ファト・サービトの4名を挙げているが [Tevetoglu 1988: 32], これは実は、「実質的設立」時の発起人をそのまま引きうつしたにすぎない。トゥナヤ氏は、この4名からアフメット・フェリトを除いた3名を挙げている [Tunaya 1984: 432]。一方、*Türk Yurdu* 誌があげた人々のうち、ハーリス・トゥルグットは、高等文官学校生徒の回想の中で、設立のための代表者であったとされる人物である [Tevetoglu. 1986b: 108]。(総理府文書を洗わなければ確実なことは言えないが)同時代の記録に符合している文官学校生徒の回想に、これでかなりの信頼が置けることになるのではなからうか。なお、キャーフヤ・エミンはおそらくメフメット・エミン(それとも

さらに次のような重要な証言もある。「炉辺」は、大方の認識とは裏腹に、発足直後、決して活発な活動をしていただけではなかった。それどころか、実は、閉鎖の危機に瀕していたのである。(おそらくは)軍医学校生徒であった人物の回顧としてテヴェトオール氏が伝えるところによると、1913年、軍医学校生徒たちは、当時イスタンブルでの溜り場であったファト・キョプリュリュの家に、ドクトル・ヒュセイン・エトゥウルルによって召集をかけられた。20-30人が集まったその緊急の会合で、エルトゥウルルは、「炉辺」の役員たちが「炉辺」をこれ以上運営できないと言っているという衝撃的ニュースを伝えた。資金難で、さしあたっての運営も不可能であるというのであった。生徒たちはうろたえた。何度か会合をもったがよい智恵は出ない。その時、学生の一人だったハサン・フェリト(ジャンセヴェル、後にトゥナヤ氏に貴重な情報を伝えることになる彼)が、「ハムドゥッラに頼んでみたらどうだろう」と発言した。すぐに賛成する者はいなかったが、しかし、皆はおそらく藁をもつかむ思いで、師範学校(Dar'ül-Muallimîn)で教育学とオスマン語とを講じていた(この年、イスタンブル大学に移る)ハムドゥッラ・スプヒを訪ねた。そして「炉辺」が閉鎖されそうなこと、もし閉鎖されれば、少数民族の学友たちに会わせる顔がないことなどを訴えた。スプヒは、現在の役員が誰かと尋ねた。アフメット・フェリト、ヒュセイ・ラーグブ、ユスフ、アクチュラその他の名が挙げられた²⁶⁾。暫くの思案の後、スプヒは決意した²⁷⁾。

アクチュラ自身が認めるように、「炉辺」を真に発展させたのはハムドゥッラ・スプヒであった[Akçura 1928 : 445-447]。ただしアクチュラは、スプヒが会長になる経緯につい

「キャーフヤ」がアフメット・フェリトかファト・サービトだろうか?), アアオールはもちろんアガエフのこと。

26) 1912年3月22日に「公式に」発足した「炉辺」の、最初の役員は、会長アフメット・フェリト、副会長ユスフ・アクチュラ、書記メフメット・アリー・テヴフィク、会計ドクトル・ファト・サービトであった[Tunaya 1984 : 432 ; Tevetoglu 1986b : 111]。したがって、この回顧に若干の記憶違いがあるか、あるいは1913年の段階で軍医学校関係者として、ファト・サービトとヒュセイン・ラーグブとの交代があったかの、いずれかであろう。

27) Tevetoglu 1986b : 113-114. テヴェトオール氏は、以下の文献からこの話を引いている。Ahmed Mazhar Âkifoglu, “Çok Aziz Örnek İnsan, Ağabeyim Hamdullah Subhî,” *Türk Yurdu*, 7th series 56 (336), 1967 : 5 - 7, また以下も参照。“Türk Ocağı İdare Raporu,” *Türk Yurdu*, 1st series, 14 (9), 1918 : 269-270. ここでは、「炉辺」の初期の活動が低調であったことが述べられている。

ては、ごく簡略な記述をするのみである。つまり、彼は軍医学校生徒が用意した暫定役員の候補者20人の中に入ってはいたが、当時はまだ十分知られた人物ではなかったので、役員にはならなかった。しかし、アクチュラの導きで「炉辺」第776番目の会員に(1912年12月25日に)なると、急速に、その本来あるべき地位に上昇し、会長になった、というのである²⁸⁾。

ともあれ、「公式の」発足後、「炉辺」の活動が必ずしも活発ではなく、しかも役員たちが閉鎖すら考えていた、という事実は重要であろう。「実質的設立」と「公式発足」の間にアクチュラが学生、生徒と行った交渉と、このこととが無関係であったと考えるのは、やはり不自然ではなからうか。

おわりに

「炉辺」設立の事情をめぐって、軍医学校生徒とユスフ・アクチュラとの関係を主軸に、ローザンヌ留学生の残した資料を手がかりにしながら述べてきた。憶測を慎もうと思いつながら、やはり肝心なところは憶測になってしまったように思う。思い込みが、事実をねじ曲げてはいまいかと恐れている。だが、アクチュラがローザンヌ留学生たちの組織を統括しようと目論んでいたことは、動かし難かろうし、さらに、同じような行動を、軍医学校生徒にとっていただろうことも、かなりの確実性を持っているのではないかと思う。だが、この点を最終的に明らかにするには、アクチュラが8月5日までの分は自分の手元にあると述べている、「実質的設立」後の議事録を探し出して分析することが必要であろう。それまで、本稿での議論は、あくまで仮説に留まる。留まるが、しかし、最後に *Türk Yurdu* 誌に掲載された記事をもう一つ引いてみたい。

「炉辺」の活動についての情報は、ハムドゥッラ・スプヒが会長になってその活動が華々しくなった後も、決して多くないが、ここではその前、1913年初頭の「炉辺」の活動を取り上げた記事を見てみたい。これは、先に引用した、「炉辺」公式発足についての短信以

28) Akçura 1928 : 445-447. ただしスプヒがいつ会長になったのか、また軍医学校生徒が彼をいつ訪ねたのかは目下不明である。1913年3月6日刊行の *Türk Yurdu* 誌には、スプヒが “Humanité” 紙記者らと共にヨーロッパへ視察旅行にでかけたことを知らせる短信が掲載されている [“Hamdullah Suphi,” *Türk Yurdu*, 1st series, 3 (10), 1913 : 320]。また同年8月13日から9月3日まで、政府派遣の視察団の一員として再度渡欧している [Tevetoğlu 1986b : 76-78]。

後、*Türk Yurdu* 誌に初めて掲載された「炉辺」関連の記事である。それによると、1月2日（木曜日）、イスタンブルで遠来のトルコ人の客人に対して、お茶の会(çay ziyafeti)が催された。彼らは、バルカン戦争で傷ついたオスマン・トルコ人将兵を看病し、また戦線の実情を調べにわざわざやってきた、*Vakit* 誌のFatih Kerimiを初めとする、カザン、クリミア、オレンブルグ、カシュガルといったロシア領内在住の人々であった。もちろんアクチュラも(当時の会長であった友人アフメット・フェリトが所用で中途退席するため)出席して司会をしていた²⁹⁾。「資金難」で閉鎖の危機に瀕するこの年の初めに行われたこの行事が、軍医学校生徒の目指していた「炉辺」よりも、アクチュラの考えたそれに、より近いものであったとは言えるのではなかろうか。

本稿劈頭に引いた「トルコ協会」についての拙論末尾に、筆者は続けて、「前者(*Türk Yurdu* 誌)には、ロシアのトルコ人世界に関する情報が豊富に掲載され、また後者(「炉辺」)は、ロシア領内のトルコ人との連絡窓口の役割を果たしてゆくはずである。」と書いた。アクチュラは本来、「炉辺」をこうした方向に(場合によっては *Türk Yurdu* という名称で)持ってゆきたかったのではなかろうか。「クラブを開くこと」あるいは「政治性を帯びること」に(アクチュラによって)集約されてしまった、軍医学校生徒との交渉の中には、実はアクチュラのこの意図と、「(オスマン)トルコ人の教育水準の向上」等を主目的とする生徒の考え方との軋轢も含まれていたのではないか。結果として妥協せざるをえなかったアクチュラは、自らが編輯に携わって、トルコ人世界の一体性を存分に強調しうる *Türk Yurdu* 誌刊行の方に、より力を入れ、「炉辺」の活動は、自分が当初めざしていた方向でのみ行ったのではなかろうか。「炉辺」初期の不振には、こんな原因が考えられるように思う。時代の風潮は、しかし、しだいにアクチュラに追い風となる。いわゆる「汎トルコ主義」の流行である。この風潮の中では、オスマン・トルコ人の目も、しだいにロシア領内のトルコ人(居住地域)に向けられていったことであろう。しかし、共和国が成立してから再建された「炉辺」では、そうした汎トルコの側面が洗い落とされ、軍医学校生徒が提起し、そしてオスマン時代にもハムドゥッラ・スプヒの指導下で、かなりの成果をあげていた側面——トルコ人が社会生活において向上し、進歩すること——が強調されてゆくことになるのである。それこそが、ジョルジョン氏や、ビュシュラ・エルサンル氏が解明し、また解明しようとしている点なのであろう [Georgeon 1982 ; Ersanlı 1985/1987]。

29) K. N., "Türk Ocagında Ziyafet," *Türk Yurdu*, 1st series, 3 (6), 1913 : 191-192.

〈ローマ字転写〉

() は書記が付け加えてしまったと思われる余分な文字を、また [] は、書記が書き飛ばしたと思われる文字で、筆者が付け加えたものを、それぞれ表している。

①(1911年12月30日)

Hüsni Bey Yusuf Akçura'dan Ragıb'a gelen mektubdan bahs açarak o konuda [hiç] bir suretde çalışmamsını söyleyen Akçuraoglu'nun Yurdunun resmiyetine karşı yeni Yurdların resmiyeti nasıl kâbil olacak diyordu.

İsmail : Ben Yurdların bir merkeze taşınmalarını elzem buluyorum, diyordu. Nazmi Bey buna itirazla şûbe meselelerinin aramızda tenâkuz etmemesi için başka bir şey düşü[n]ülmesini söylüyordu.

Akçura'nın mektubu etrafında epey dolaşarak aynı gayeyi gütdükleri halde yine niçin yabancı kalacağı ve kalmak istediği anlaşılmıyordu. Nizamnamece merkezler hakkında bir imtiyaz olmayacağını, yalnız bir murahhaslık verileceğini ortaya süren bütün âzâ-yı mevcûde(nin) niçin Akçura'nın imza atmaya geleceğini anlamıyordu. Sonra Ragıb'a Kabasakal Yurdunun resmiyet ve programının ne halde olduğu soruldu. Ragıb cevaben bir gazete hey'et-i tahririyesini teşkil eden Ahmed Agayef, Ahmed Hikmet, Akçura ilh zevatın Kabasakal'da <Türk Yurdu> altında toplandıklarını, fakat bu halle kalmayıp bir az büyükçe gayeleri olduğunu zannetdiğini söylüyordu.

Bu murahhaslıktan mes'ûliyet anlaşılabileceğini, meselâ Konya Yurdunun yapacağı bir hatadan o murahhaslık mes'ûl olacağı tabîî görüneceğini bir kaç kişi söylemekle, mesaiye başlamak için bir ufak imtiyazdan başka şeyler tanımayacakları tekrar edilerek bu hususda Akçura ile tekrar görüşmek icabetdiği söylendi. Ve Ragıb'ın husûsî suretde Akçura ile müzakere etmesi münâsib görüldü. <Türk Yurdu> namıyla Haydarpaşa'da Tıbbiyelilerin tesis etmek üzere oldukları cem'iyetden söz açılarak nizamnamelerinin istenilmesi cümle he'yet-i idareye tebliğ edildi. Bundan sonra şahsî teklifâta geçilerek Fazlî Bey'in İstanbul'da tesis edilen <Türk Ta'mim-i Ma'ârif> cem'iyeti nizamnamesinin getirilmesi (ni) teklifi kabûl edilerek ictimaa saat dörtte nihayet verildi. (第6回会合, 1 - 2 頁)

②(1912年1月6日?)

Ragıb kimseye söz vermeden geçen ictimadaki mukarrerâtı yerine getirdiğini, ve bu yolda Akçuraoglu'na böyle bir ifâde gönderdiğini, Haydarpaşahlara ve Ta'mim-i Ma'ârif Cem'iyetine icabetdiği üzere mektublar yazdığını söyleyerek Haydarpaşalıların <Lozan Türk Yurdu Haydarpaşa şûbesi> mühürü ve klîşesi altında gelen mektub ve nizamnamelerini ele aldı. Her ikisini de karşılaştırarak nizamnameyi ve mevaddını ne suretle anladıklarını mübeyyin mektubla birlikte okuyordu…… Bu nizamnamedeki mevad, sanki kabûlüne muhtar imişiz gibi işlerimizi müşkil

gösteriyor, ve bizi korkutuyordu. Meselâ Türkiya'da açılacak her Yurd Haydarpaşa merkez şûbesinin nizamnamesini kabûl ederek bil'istîzân kendini tanıyıp tanıtılabileceği ve onun Lozan Türk Yurdu Haydarpaşa Şûbesinin şûbesi hâinden ileri gidemeyeceği kaygısı Lozan Türk Yurdu re'isi Ragıb'ın gelecek sene İzmir'de aç[ıl]acağ(ı) beşinci Yurdda Lozan Türk Yurdu Haydarpaşa şûbesine «Evet efendim!» kozuyla çıkacağı göz önüne geliyordu. [Mes]ele oldukça mühimdi.

Şimdilik kendi başlarına çalışarak mevkimizin kat'iyet ve resmiyet kesbetmesiyle uyuşabileceğinden dolayı Lozan Şûbesi kaydının klişelerden silinmesine bütün âzâ karar vermekle Ragıb'a icabetdiği üzere hareket etmesi söylendi. (第7回会合, 1頁)

③(1912年1月13日)

Ragıb gerek mektubdaki diğer mevaddın ve gerek kendine taalluk eden o mütebidlik noktasının ve gerekse Akçura ile resmen münakaşaya giriştiği yolsuzluğun cezasını vermek için Pazar'da Cenevre'ye gideceğini söyledi.

Buna Akçura ile müzakerelerinin yalnız Ragıb'a bırakılarak husûsî olduğu, fakat her iki yurdla alâkadâr bu merkezîyet mes'elesinin bize ahbar-ı keyfiyet edilmeden Cenevrelilerce cür'etkârâne karıştırıldığı, mektublarını yazdıktan sonra Akçura ile müzâkereye girişdiklerini bildirmeleri bütün âzâyı hiddetlendirivermişti.

..... Merkezîyetin müsaadeyi tahsîsinden başka bir şey yapamayacağı fakat murahhaslıktan ziyade mümessillik. Pervâsız ve korkusuz ifâde edeceği küçük imtiyazın işi halledeceği hakkın-da Ragıb'ın uzunca bir nutku dinlendi.

Hüsni Bey hüsn-i intizamdan mahrûm adamlar, bir merkeze bile merbut olsalar, kendi başlarına çalışacakları tabîî olur. Bunlar arasında Akçura'nın dediği gibi bir relasyon olacak. Çünkü gaye birdir, lâkin tarz-ı sa'y bir sırada olamayacak. Haydarpaşa'yı ele alalım. Tıbbiyeliler, Türkleri, Osmanlılığı unutmamaya ilerletmek istiyorlar. Fakat gayeleri yine Türklükde kalıyor. Ragıb da Akçura'nın mektubundan bir satırı okuyarak ötede beride açılacak Yurdların kâbiliyet-i hayatiyelerini düşündükten sonra formel bir rabita düşünecekleri tabîî olduğunu söyledi. (第8回会合 1 - 2 頁)

④(1912年1月21日)

Bundan sonra Ragıb Haydarpaşalıların Akçura ile yaptıkları mülâkâta nakl-i kelâm ederek Haydarpaşalıların mektubunu ve bunda münderic sûret-i mülâkâtı okudu. Bir kaç ictima evvel Akçura'nın cem'îyetin kanununu bilmediğini ve müteaddid Türk Yurdlarının ayrı ayrı resmiyet kesbedemeyeceklerini söyleyen Nâil'e ; Akçura'nın sarhoş olmadığını göstermeyi, yarışarak hatırlatan arkadaşlar, bilinmez neden bir az sukut-ı hayale uğramışlardı. Her ne ise Akçura'nın, [«]evet...hayır ...bilmem!«] lerinden sarhoşluğu değil fakat kolayca kestirilemez bir hâletle bize

çıkıldığı görülüyordu.

Akçura Bey Haydarpaşahlılara müteaddid Yurdların ayrı resmiyet alıb ayırca çalışabilecekleri hakkında epey ma'lûmâtı olmadığını beyân ile hükûmete bil'mürâcaa bunu tahkîk edebileceklerini söylemiş ve bunun üzerine Hüsnî ve Nâil yapılacak işin isim değiştirmek ve müstakillen çalışmak olduğunu beyân ediyorlardı. Âhir bir vakte ta'lik ile gelecek mevzu-i mektuba intizar edilmesi münâsib görüldü. (第9回会合1頁)

参考文献

Akçura(oğlu), Yusuf

1928 *Türk Yılı : 1928*, Istanbul.

Akyüz, Kenan

1986 Türk Ocakları, *Belleten*, 50(196).

Alangu, Tahir

1968 *Ömer Seyfeddin : Ülkücü bir Yazarın Romanı*, Istanbul.

Ersanlı, Büşra

1985/1987 Birinci Türk Tarihi Kongresi 1932 : Türkçülükten Yurttaşlığa, *Toplum ve Bilim*, 31/39.

Esin, Emel

1971 Ahmed Ferid Tek, *Türk Kültürü*, 10(110).

Georgeon, François

1982 Les Foyers Turcs à l'époque kémaliste, *Turcica*, 14.

Gövsâ, İbrahim Alaettin

n. d. *Türk Meşhurları Ansiklopedisi*, Istanbul.

Hamdullah Suphi

1930 Türk Ocağının Tarihçesi ve İtirallara Karşı Cevaplarımız, *Türk Yurdu*, 3rd series, 5(25).

Hisar, Abdülhak Şinasi

1954 Türk Ocağı Hatıraları : Ocağın Doğduğu Zaman ve Muhit, *Türk Yurdu*, 4th series, 1(1).

Landau, Jacob M.

1981 *Pan-Turkism in Turkey : A Study of Irredentism*, London.

Lewis, Bernard

1968 *The Emergence of Modern Turkey*, 2nd ed., London.

Orkun, Hüseyin Namık

1977 *Türkçülüğün Tarihi*, 2nd ed., Ankara.

Şapolyo, Enver Behnan

1934 *Ziya Gökalp : İttihad ve Terakki ve Meşrutiyet Tarihi*, Istanbul.

Tevetoğlu, Fethî

1986a *Müftüoğlu Ahmed Hikmet*, Ankara.

1986b *Hamdullah Subhi Tanrıöver*, Ankara.

1988 *Mehmet Emin Yurdakul*, Ankara.

Tunaya, Tarık Zafer

1984 *Türkiye'de Siyasal Partiler*, vol. 1, Istanbul.

Tutanak

Lozan Türk Yurdu Tutanak Defteri, (Türk Tarih Kurumu Yazmaları, Y/653.)

Ülken, Hilmi Ziya

1979 *Türkiye'de Çağdaş Düşünce Tarihi*, 2nd ed., Istanbul.

Yurtçular Yasası

1913(?) *Yurtçular Yasası*, Genève.

新井政美

1984a 「トルコ協会」の設立とその活動,『東洋学報』,63(3-4)

1984b 「ゲンチ・カレムレル」と青年トルコ人,『史学雑誌』,93(4)

1984c 「三つの政治路線」への二つの反論,『人文研究』(大阪市立大学文学部),36(9)

1985 「テュルク・ユルドゥ」(*Türk Yurdu*)研究序説,『オリエント』,28(1)

1989 スイスにおけるトルコ人留学生の活動:ローザンヌ,ジュネーヴ,ヌーシャテルシャテル
(1909-1912),『人文研究』(大阪市立大学文学部),41(掲載予定)